Ⅱ　農業科学館

1　利用者の分析

(1)企画・教室からの分析

設立当初の平成3年度の入館者は91,636人であったものの、平成4年度以降入館者が低迷し、3万人台になる年度もあった。しかし、入場料を無料化した平成11年度より平成15年度まで5年度連続して入館者が増加し、平成15年度の入館者は108,028人に達している。

入館者が低迷した理由の1つとして、平成3年度の設立以来現在まで、主要な常設展示室である第一、第二展示室の内容を更新していないため、入館者に「いつ来ても同じ」と思われ、常設の展示機能は入館者にとって魅力が薄れていたことが挙げられる。

一方、無料化後の入館者の増加要因を分析すると、花の企画に比例して、入場者が増加していることがわかる。

表2-1　企画展示・園芸教室・おやこ自然教室・花工房の件数と参加者の推移

		H11 年度	H12 年度	H13 年度	H14 年度	H15 年度	H16 年度
企画・教室数（件）	［件数］						
	花	(注)2	37	46	50	49	49
	花以外	(注)2	28	13	17	28	23
	計	－	65	59	67	77	72
	［構成比］						
	花	－	57%	78%	75%	64%	68%
	花以外	－	43%	22%	25%	36%	32%
	計	－	100%	100%	100%	100%	100%
参加者数（人） (注)1	［人数］						
	花	(注)2	547	589	661	717	－
	花以外	(注)2	670	473	637	511	－
	計	－	1,217	1,062	1,298	1,228	－
	［構成比］						
	花	－	45%	55%	51%	58%	－
	花以外	－	55%	45%	49%	42%	－
	計	－	100%	100%	100%	100%	－
入館者数（人）		59,161	64,869	80,912	90,286	108,028	－

（農業科学館作成資料を一部加工して作成）

(注)1.参加者数は、園芸教室・おやこ自然教室・花工房の人数であり、企画展示の人数はデータがないので含まれていない。

(注)2.データはない。

図 2-1　参加者数（花、花以外）、入館者数の推移

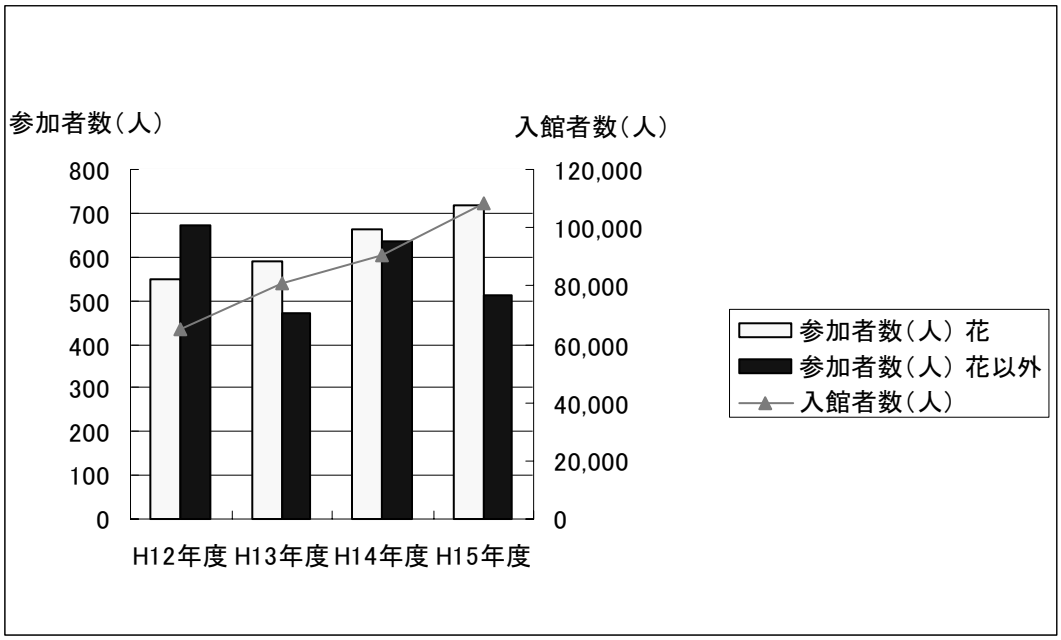


表 2-2　ラン展の推移

		H11 年度	H12 年度	H13 年度	H14 年度	H15 年度	平均値
ラン企画展示日数(日)	a	2	2	2	2	3	―
ラン展開催日の 入館者数合計（人）	b	1,814	3,398	3,481	6,363	2,276	3,466
ラン展開催日の平均入館者数（人）	c=b/a	907	1,699	1,741	(注) 1 3,182	(注) 2 759	1,657
年間入館者数（人）	d	59,161	64,869	80,912	90,286	108,028	―
年間稼働日（日）	e	308	308	307	306	305	―
ラン展開催日以外の平均入館者数（人）	f=(d-b)/(e-a)	187	201	254	276	350	254

（農業科学館作成資料を一部加工して作成）

(注) 1．3 月開催が定着し、報道機関に取り上げられたため、平均入館者数が増加した。

(注) 2．3 月開催を 11 月開催に変更したことが周知されず、また、報道機関に取り上げられず、平均入館者数が減少した。

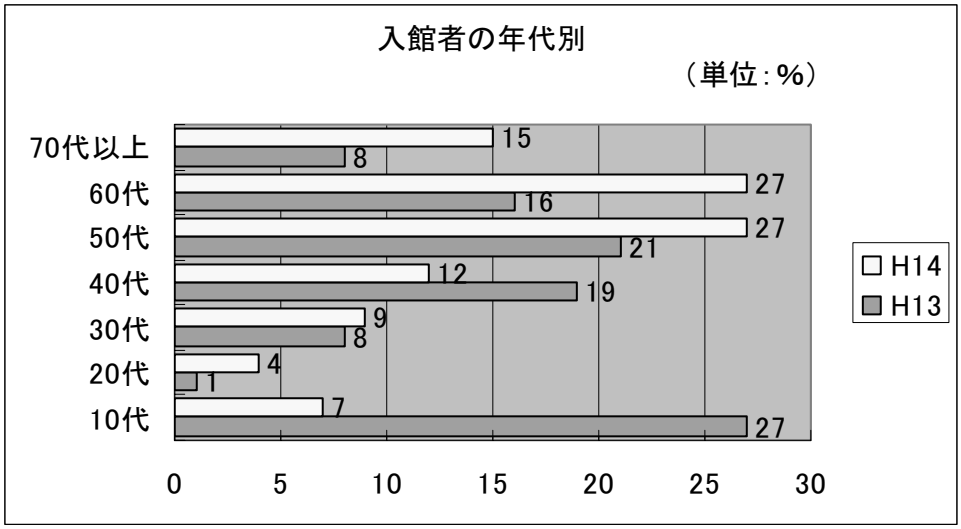
第一、第二展示室の内容が設立時と変わっていないことから、展示室目的ではなく、花の企画展を目的として農業科学館に入館する人が多いと考えられる。

特に、ラン展の人気は高い。平成 11～15 年度で言えば、ラン展開催日の平均入館者数は 1,657 人であり、ラン展開催日以外の年間平均入館者数 254 人の 6.5 倍となっている。この事例を取ってみても、展示室目的ではなく、花の企画展を目的として入館する人が多いと言える。

(2) 入館者の年代別からの分析

入館者を年代別にみると、50 代、60 代を中心にその前後の入館者が最も多く、実に 40 代以上で 80%を占めている。農業科学館の入館者は、中高年層が支えていることが鮮明に示されている。

図 2-2　入館者の年代別



（アンケート調査(注) 1 を一部加工して作成）

(注) 1. アンケート調査の概要（以下、「1　利用者の分析」において同じ。）

対象者：中学生以上の一般入館者（団体も含む）

期間：（平成 13 年度）平成 13 年 11 月 20 日～平成 13 年 12 月 19 日

（平成 14 年度）平成 14 年 9 月 20 日～平成 14 年 10 月 14 日

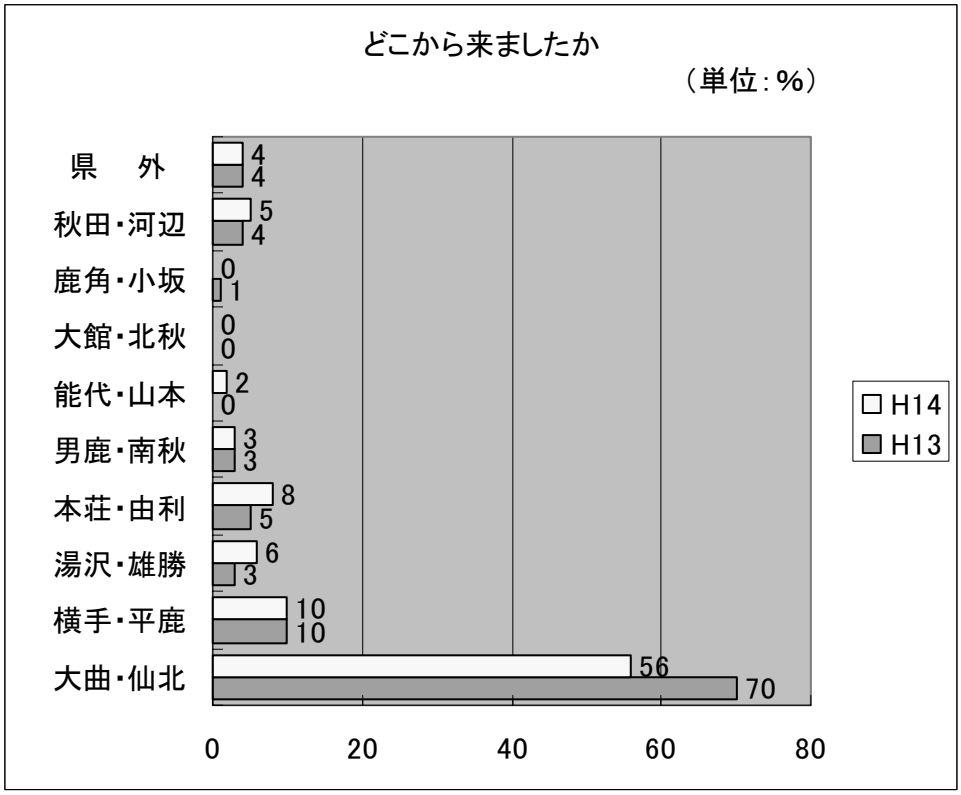
調査数：（平成 13 年度）166 名、（平成 14 年度）233 名

(注) 2. 平成 13 年はアンケート調査期間中に中学生が団体で学習に来ているため、10 代の割合が高い。

(3) 入館者の地域別からの分析

入館者を地域別でみると、地元の大曲・仙北の県民が多く、まさに“おらだの館”の意識が強くなってきている。また、交通の不便さにより地元以外の入館者が少ない。

図 2-3　入館者の地域別

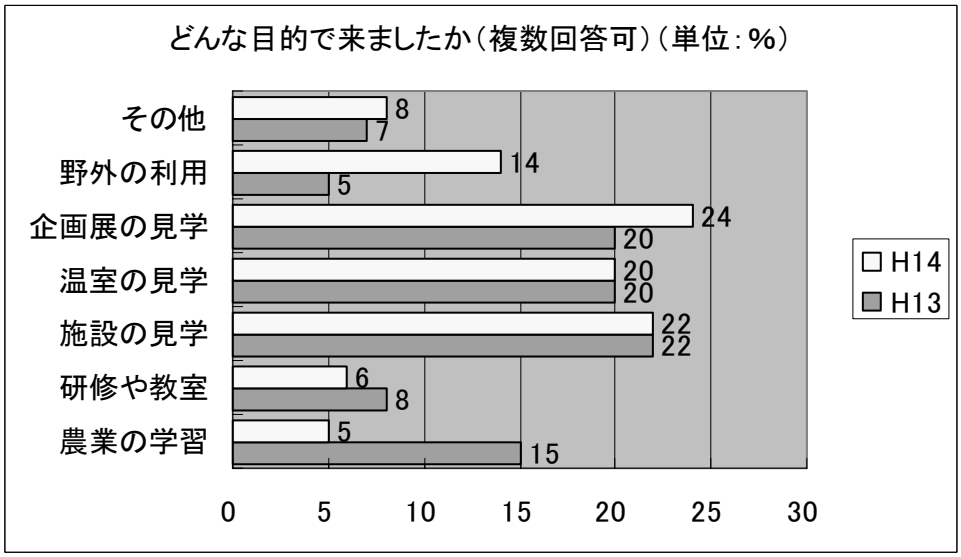


（アンケート調査を一部加工して作成）

(4) 入館者の目的別からの分析

入館者を目的別にみると、「娯楽的」目的での入館がほとんどであり、学習目的の入館者が減少している。花の企画展をただ一通り見て終わることも原因の１つと考えられる。

図 2-4　入館者の目的別

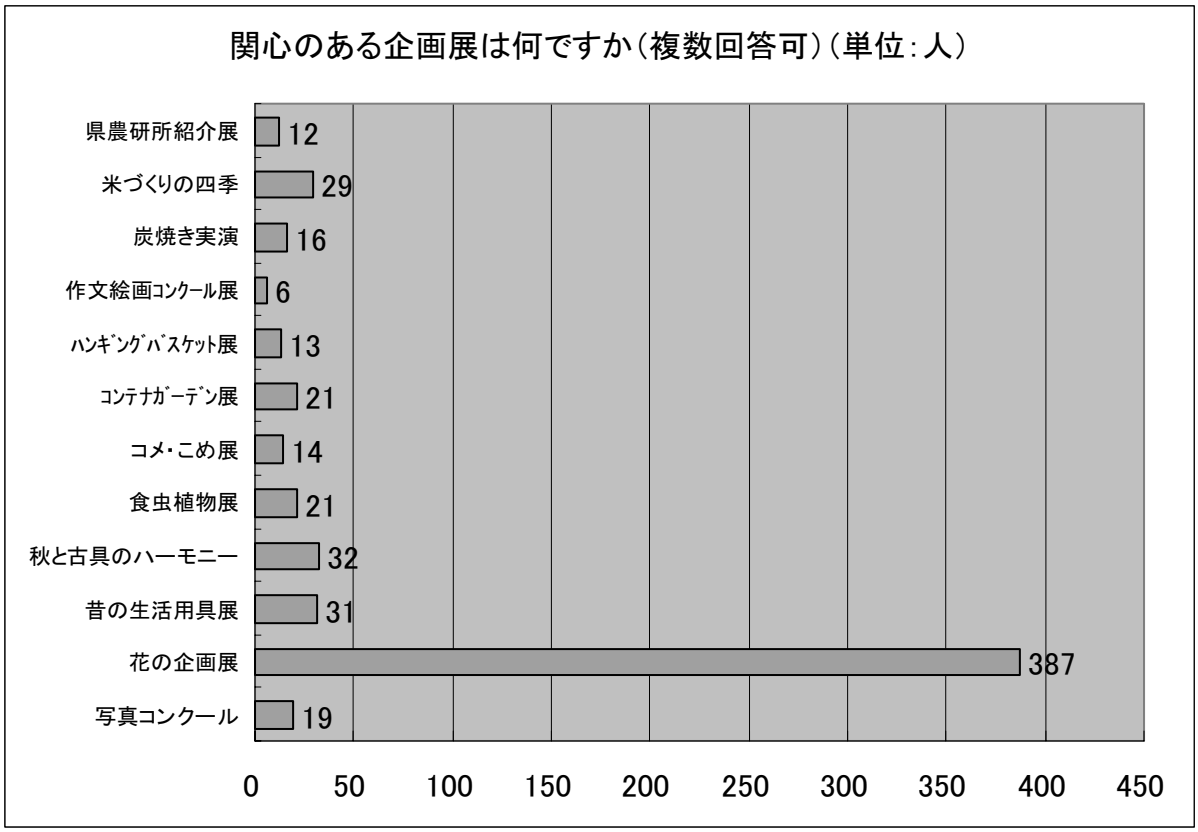


（アンケート調査より作成）

(5) 入館者が関心のある企画展からの分析

入館者の関心のある企画展をみると、花への人気が非常に高く、花の企画への入館者の期待は大きいものがある。これは、「(1)企画・教室からの分析」の結果とも一致している。

図 2-5　入館者の関心のある企画展



（アンケート調査を一部加工して作成）

(注)花の企画展は、以下の企画展示の合計である。

バラ展(69 人)、コスモス展(68 人)、洋ラン展(61 人)、サツキ展(39 人)、ユリ展(35 人)、春を呼ぶ花展(33 人)、アイリス展(27 人)、コンテナガーデン展(21 人)、菊花展(18 人)

アンケート調査期間中に、「バラ展」、「コスモス展」が開催されていたため、上位にランクされたと思われる。

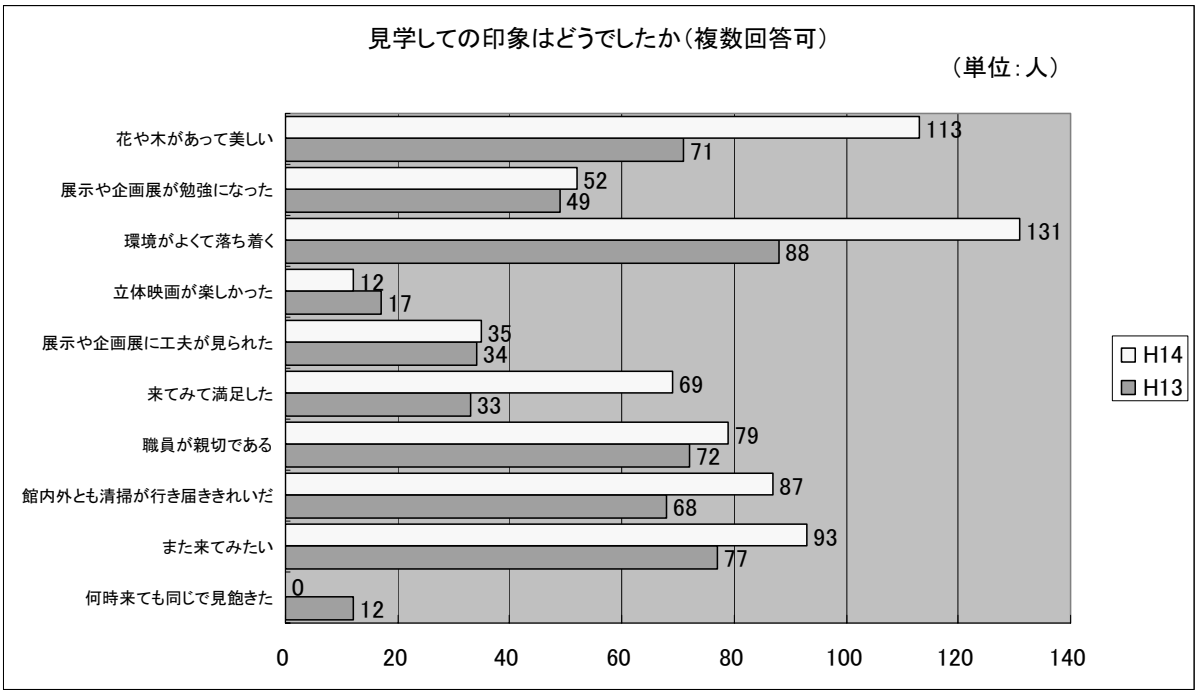
(6) 入館者の印象からの分析

入館者の印象をみると、上位 1、2 位が示すように入館者にとって農業科学館は、「環境がよくて落ち着く」「花や木があって美しい」場所であり、それを求めて大勢の入館者が

来ている。また、「立体映画」（バイオシアター）と「展示企画の創意工夫」の印象は低かった、と農業科学館では分析している。

農業科学館を学習目的ではなく、公園のような安らぎの場所として入場している入館者が多いと言うことができる。

図 2-6　入館者の印象



上述の(1)～(6)の分析から、農業科学館は「大曲・仙北在住の中高齢者が花の企画展示を目的に入館する」機能を高い割合で担っていると言える。

2　財務・人員の分析

厳しい財政状況の中、各施設の予算も削減対象と考えられるが、農業科学館も例外ではなく、管理運営費が減少傾向にある。予算削減が農業科学館の業務にどの程度影響を及ぼしているかは、必ずしも明確ではないが、入場者数だけを捕らえれば、5 年度連続増加しており、予算削減のなかで、健闘していると言える。また、人員については、過去 5 ヵ年度において大幅な減少は見られない。

(1) 決算支出

管理運営費、自主運営費とも、一般財源予算の削減にほぼ比例して逓減していると言えるが、構成比（支出合計に対する各費用の割合）に大きな変動はない。平成 15 年度で、自主事業費比率 2.9%に比べ、給与費比率と管理運営費が、それぞれ 49.0%、48.1%と高い。

農業科学館の場合、自主事業費比率が 2.9%と低いからといって、入館者の低迷に結びついていない。花の企画展示を主力とし、追加費用のかからない事業を創意工夫して、自主事業費比率が低くとも、平成 11 年度からの入館者を 5 年度連続増加という結果に結びつけている。ただし、「１．利用者の分析」に記載したように、入館者数の増加が花の企画展示に偏っていると言える。

表 2-3　決算支出推移

（単位：千円）

	H11 年度	H12 年度	H13 年度	H14 年度	H15 年度
［金額］					
給与費	68,835	75,854	84,154	78,821	67,390
管理運営費	79,220	74,067	72,660	71,161	66,090
自主事業費	3,501	3,859	4,590	5,582	4,051
計	151,556	153,780	161,404	155,564	137,531
［構成比］					
給与費比率	45.4%	49.3%	52.1%	50.7%	49.0%
管理運営費比率	52.3%	48.2%	45.0%	45.7%	48.1%
自主事業費比率	2.3%	2.5%	2.9%	3.6%	2.9%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(2) 人員構成

平成 15 年度で言えば、総務班の全職員に対する比率は 41.2%に達しており、間接業務人員の比率が高いと言える。

表 2-4　人員構成

（単位：人）

区分	H11 年度	H12 年度	H13 年度	H14 年度	H15 年度
［人数］					
総務班	7	6	6	6	7
総務班以外	9	10	10	10	10
職員計	16	16	16	16	17
［構成比］					
総務班	43.8%	37.5%	37.5%	37.5%	41.2%
総務班以外	56.3%	62.5%	62.5%	62.5%	58.8%
職員計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(注)各年 4 月 1 日現在の人員を記載している。

3　ベンチマークや類似施設との比較分析

農業科学館と呼ばれる施設は全国にはほとんどないため、同種機関の平均値あるいは最も良い数値をベンチマークとして、比較分析することはしなかった。

「1．利用者の分析」に記載したように、農業科学館は「大曲・仙北在住の中高齢者が花の企画展示を目的に入館する」機能を高い割合で担っていることから、秋田県が運営する類似施設と比較分析を行った。

秋田県が運営する類似施設として、農業研修センター（旧農業技術交流館）・生態系公園（農林水産部所管）を選定した。

(1) 事業比較

表 2-5　農業科学館と農業研修センター・生態系公園の事業比較

	農業科学館	農業研修センター（旧農業技術交流館）・生態系公園(注) 1
＜設置目的＞	秋田県の農業及び林業並びに農村生活に関する理解を深めるとともに、農業及び林業に関する科学技術につい	農業者に対して農業技術を習得させ、農業者の福祉増進を図るため設置する。

	農業科学館	農業研修センター（旧農業技術交流館）・生態系公園(注) 1
	て学習の機会を提供し、もって県民の文化の向上に寄与するため設置する。	
＜場所＞	大曲市	大潟村
＜開設＞	平成 3 年 5 月	平成 4 年 4 月
＜面積＞	9 ﾍｸﾀｰﾙ	8.6 ﾍｸﾀｰﾙ
＜展示＞		
第一展示室	472 ㎡	
第二展示室	472 ㎡	
バイオシアター	116 ㎡	
展示通路	246 ㎡	
曲屋	192 ㎡	
＜温室＞		
観賞温室	473 ㎡	第 1 温室 346 ㎡ 第 2 温室 242 ㎡ 第 3 温室 345 ㎡
育成温室	155 ㎡	
＜資料＞		
図書資料室	58 ㎡(入館者は入室できない区域にある)	
収納庫	305 ㎡	
資料庫	218 ㎡	
多目的ホール	247 ㎡	753 ㎡。座席収納時は多目的に使用可能。
＜会議等＞		
会議室	58 ㎡	・第 1 研修室 161 ㎡ ・第 2 研修室 114 ㎡ ・第 1 セミナー室 52 ㎡ ・第 2 セミナー室 29 ㎡
やすらぎホール	154 ㎡（常設の食堂は撤退済である）	食堂「レストラン・バイオ」
和室	46 ㎡	
その他	あずま屋、休み屋、野外炉、芝生広場、花壇広場、落葉広葉樹林、樹木園、果樹園、りんご園、せせらぎ	あずま屋、ブナ林、カツラ林、ケヤキ林などの樹木林、「水辺の植物」「里山の植物」などの植物群落、くつろぎながら散策できる池、小川、芝生広場

	農業科学館	農業研修センター（旧農業技術交流館）・生態系公園(注) 1
＜企画展示＞	年 33 件(平成 15 年度)(うち、16 件は花の企画展示、6 件は農業試験場等試験研究機関のパネル紹介展)	・バラ、フジ、山桜、紅葉、花壇等がある。また、鑑賞温室は、通称ランハウスと呼ばれ、色とりどりのランの花を楽しむことができる。 ・県民向けの研修「依頼・受託技術研修」等や農業者向け研修では、農業試験場等の試験研究機関の職員が講師を務める研修を準備している。
＜園芸教室＞	年 11 件(平成 15 年度)	県民向けの研修「自然体験研修」として年 17 件。 例えば、「洋ランの楽しみ方」「バラを楽しむ」「花壇づくり」等の農業科学館と内容が類似した研修が含まれている。
＜おやこ自然教室＞	年 16 件(平成 15 年度)	・県民向けの研修「自然体験研修」のなかに、親子を対象とした「こども自然体験教室」として年 2 回。 ・県民向けの研修「バイオ実験室研修」
＜花工房＞	年 5 件(平成 15 年度)	
＜園芸相談＞	年 11 件(平成 15 年度)	毎週水曜日
＜ふれあいデー＞	「ふれあいデー」として年 2 日	県民向けの研修「ふれあい参観デー」として年 2 日。
＜セカンドスクール的利用＞	20 のプログラム(平成 15 年度)	県民向けの研修「園芸体験講座」として、小学生を対象に、夏休み、総合体験学習を行う。
＜農業手作り体験研修＞		年 6 回
＜農業者向け研修＞		・インターネットアグリスクール(注) 2 ・フロンティア農業者育成研修 ・プロ農業者育成研修
＜パソコン、インターネット研修＞		県民向けの研修「情報処理技術研修」

(注) 1. 農業研修センターの内容は、「平成 16 年度主催講座のご案内」やホームページ、実際の入場体験を参考に記載している。

(注) 2. インターネットアグリスクールは、秋田県農業や就農に関心を持った方々に、ホームページや電子メール等で通信教育をおこなう学校である。応募資格は問わず、誰

でも入学可能である。

秋田県が運営する類似施設として挙げた、農業研修センター・生態系公園と農業科学館の事業を比較すると、事業内容は類似している。

機能的な違いは、農業研修センター・生態系公園には、農業科学館の第一、第二展示室、バイオシアター等がないことであるが、「１．利用者の分析」に記載したように、農業科学館の第一、第二展示室、バイオシアターについて、入館者からの支持が低いことを考慮すれば、機能的には、農業科学館と農業研修センター・生態系公園の事業内容は類似していると考えられる。

次に、教育的機能に着目すれば、農業研修センター・生態系公園では、県民向けの研修と農業者向け研修を用意しており、研修内容が充実している。インターネットアグリスクールは、教育的機能としては農業科学館を上回る点も多いと考えられる。

また、農業科学館の入館者は学習目的ではなく、公園のような安らぎの場所としている人も多いが、農業研修センター・生態系公園も同規模の敷地面積を有し、観賞温室の規模は農業科学館よりも大きく、名称の通り公園機能を有している。公園機能に着目しても、農業研修センター・生態系公園は、農業科学館と類似していると考えられる。

したがって、農業研修センター・生態系公園と農業科学館の事業を比較すると、事業内容は類似していると考えられる。

(2)財務比較

農業科学館と農業研修センター・生態系公園の行政コスト計算書を比較してみる。

表2-6　行政コスト計算書の比較（平成14年度）

（単位：千円）

	農業科学館		農業研修センター・生態系公園	
区分	金額	構成比率	金額	構成比率
Ⅰ人にかかるコスト	97,309	48.70%	133,636	47.71%
人件費	93,332	46.71%	119,028	42.50%
退職給与引当金	3,976	1.99%	14,608	5.22%
Ⅱものにかかるコスト	95,317	47.70%	110,948	39.61%
物件費	26,480	13.25%	52,324	18.68%
維持修繕費	6,137	3.07%	2,403	0.86%
減価償却費	33,163	16.60%	24,254	8.66%
委託費	29,535	14.78%	31,965	11.41%
Ⅲ移転的なコスト	158	0.08%	35,501	12.67%
Ⅳ　その他	7,027	3.52%	0	0.00%
公債費	7,027	3.52%	0	0.00%
その他	0	0.00%	0	0.00%
A　行政コスト計	199,811	100.00%	280,087	100.00%
B　収入計	747	0.37%	20,745	7.41%
純行政コストA－B	199,063	99.63%	259,341	92.59%
人口（H15.4.1）（人）	1,168,718		1,168,718	
県民1人あたりの純行政コスト(円)	170		221	
年間入館者（人）	90,286		154,674	
入館者 1 人あたりの純行政コスト（円）	2,205		1,677	

（注）１.退職給与引当金は県職員の退職金要支給額増加額を示すが、「作成対象年度末所要額－作成対象前年度末所要額」で算出するため、マイナスとなる場合がある。

（注）２.農業研修センター・生態系公園の年間入館者は、ホームページ上の農業研修センター研修実績総括表の延べ利用者数4,470人と生態系公園の入園者数150,204人の合計数値である。

県民1人あたりの純行政コストは、農業科学館が170円に対して、農業研修センター・生態系公園が221円であるものの、入館者1人あたりの純行政コストは、農業科学館2,205円に対して農業研修センター・生態系公園は1,677円と低い。